

# 町はずれの空き地

小川未明

青空文庫



空<sup>あ</sup>き地<sup>ち</sup>には、草<sup>くさ</sup>がしげつていましたが、いまはもう黄<sup>き</sup>色<sup>いろ</sup>くなつて、ちようど柔<sup>やわ</sup>らかな敷<sup>しき</sup>物<sup>もの</sup>のように地<sup>じ</sup>面<sup>めん</sup>に倒<sup>たお</sup>れていました。霜<sup>しも</sup>の降<sup>ふ</sup>つた朝<sup>あさ</sup>は、かえつて日<sup>ひ</sup>が上<sup>のぼ</sup>ると暖<sup>あた</sup>かになるので、この付<sup>ふ</sup>近<sup>きん</sup>に住<sup>す</sup>む子<sup>こ</sup>供<sup>ども</sup>たちは、ここへ集<sup>あつ</sup>まつてきて、たこをあげるものもあれば、ボールを投<sup>な</sup>げて遊<sup>あそ</sup>ぶものもありました。

この空<sup>あ</sup>き地<sup>ち</sup>の中<sup>ちゆう</sup>央<sup>おう</sup>に、一<sup>ぼん</sup>本<sup>たか</sup>の高<sup>まっ</sup>い松<sup>き</sup>の木<sup>き</sup>がありました。独<sup>ひと</sup>りぼつちで、いかにもその姿<sup>すがた</sup>がさびしそうに見<sup>み</sup>えることもあれば、また、さびしいということなど知<sup>し</sup>らぬ聖<sup>せい</sup>人<sup>じん</sup>のよう<sup>よう</sup>に、いつもにこにことして、子<sup>こ</sup>供<sup>ども</sup>たちの遊<sup>あそ</sup>んでいるのを見<sup>み</sup>守<sup>まも</sup>るよう<sup>よう</sup>に見<sup>み</sup>えたこともあります。

この町の<sup>まち</sup>子供<sup>こども</sup>たちは、みんなこの木<sup>き</sup>を知<sup>し</sup>つていました。たとえ木<sup>き</sup>のそばへ寄<sup>よ</sup>つて、ものをいいかけなくとも、お母<sup>かあ</sup>さんが留守<sup>るす</sup>でさびしいときや、お父<sup>とう</sup>さんにしかられて、悲<sup>かな</sup>しかったときは、遠<sup>とお</sup>くから、ぼんやりとこの木<sup>き</sup>をながめて訴<sup>うった</sup>えたものです。すると、木<sup>き</sup>は、

「私<sup>わたし</sup>のところへおいで。」と、手招<sup>てまね</sup>きするように、なぐさめてくれたものでした。

だから、もし、この広場<sup>ひろば</sup>に、工場<sup>こうじよう</sup>でもできるとか、また、道<sup>みち</sup>が通<sup>とお</sup>るとかいうようなことがあつて、この木<sup>き</sup>を切<sup>き</sup>る話<sup>はなし</sup>でも持ち<sup>も</sup>上がったなら、おそらく、この辺<sup>へん</sup>の子供<sup>こども</sup>たちはどんなに悲<sup>かな</sup>しむことかしかれません。悲<sup>かな</sup>しむばかりでなく、

「あの木を切るのは、かわいいそうだ。」と行って、大人たちに向かつて、同意を求め、この木を切ることに反対したでありましたよう。

その、多くの子供たちの中にも、立雄くんや、博くんは、いちばんこの高い松の木を愛している少年でした。他の子供たちが、いろいろのことをして遊んでいるのに、二人は、みんなから離れて、松の木の下にきて、枯れ草の上ですわって話をしました。

「きれいな、空だなあ。」と、ふいに、大空を見上げて、博くんが、いいました。

「まだ、春にはなかなかなんだね。早く春がくるといいなあ。」

と、立雄くんは、赤みを帯びた、松の木の幹をながめて、去年の春、遠足にいつて田舎道を歩いたときの景色を思い出したのです。

「ごらんよ。あの白い雲は、ちょうど松の木の上にいるから。」と、博くんが、いいました。

「松の木と、雲と、話をしているのだね。」と、立雄くんが、答えました。

ふたり二人の少年は、松の木の頂と、さらにはるかに高く、遠い、青い空に浮かぶ、白雲を見上げて笑っていました。

「どんな話をしているのだろう？」

「きつと、雲さん、君は、どこへでも飛んでいけておもしろいだ

ろうな、と、松の木がいつているのだよ。」と、立雄くんが、い  
 いました。

「僕はね、松の木くん、君はいつも地の上で平和に暮らされてう  
 らやましい。美しい鳥が止まったり、子供たちの遊ぶのを見たり  
 して、愉快だろう。私は、風に吹かれてこうして、海の上や、野  
 原の上を、毎日あてなく飛んでいると、雲がいつているのだと  
 思うな。」と、博くんが、いきました。

そのうち、おひるの汽笛が鳴ったので、二人は、草の上から起  
 き上がって、あちらへ歩いていきました。

近ごろになって、この原っぱへきはじめた、コリントゲームの  
 おじいさんが、今日も店を出して、まわりには、もうたくさん子

ども  
供たちが集まあつっていました。そして、赤あかい風船玉ふうせんたまが、ふわふわと幾いくつも台だいに結むすびつけられて、キヤラメルや、あめの棒ぼうなどが、そばに置おいてありました。

ふたり  
二人は、立たって見みていました。

すると、このとき、あちらで、カチ、カチという、拍子木ひょうしぎの音おとがしました。

「あつ、紙芝居かみしばいがきた……。」

くろ  
「黒くろい眼鏡めがねのおじさんだよ。」

こども  
子供たちは、口々くちぐちにそういつて、たちまち、おじいさんの、

コリントの前まえからはなれて、あちらへ走はしっていきました。立雄たつおくんも、博ひろしくんも、やはり同おなじであつたのです。



活動かつどうの弁士べんし上がりであつた、紙芝居かみしばいのおじさんは、説明せつめいがなかなか上手じょうずなので、子供こどもたちには、たいそう好すかれていました。

おじさんは、いつものように、子供こどもたちを相手あいてにして、お話はなしをはじめていました。そこへ、だしぬけに、コリントのおじさんが、やつてきました。

「おい、ここで店みせを開ひらくのはよしてもらおう。」と、おじさんが、いいました。

黒くろい眼鏡めがねをかけた、紙芝居かみしばいのおじさんは、

「冗じょうだん談だんじゃない。おじいさんこそ、ついこのごろここへやつ

てきたのじゃないか？ 私わたしは、もうずっと、ここへきているのだ。

ここに<sup>ぼつ</sup>いる坊ちゃんや、お嬢<sup>じよう</sup>ちゃんたちに<sup>き</sup>聞いてみてもわかるよ。ねえ、そうだろう……。それ<sup>ごらん</sup>よ。おじいさん、そんな無理<sup>むり</sup>を<sup>い</sup>ってはいけないぜ！」と、おじいさんは、いいました。立雄<sup>たつお</sup>くんも、博<sup>ひろし</sup>くんも、どうなるだろうと<sup>み</sup>見ていました。おじいさんは、一歩<sup>ほまえ</sup>前<sup>よ</sup>へ寄<sup>よ</sup>つて、

「若<sup>わか</sup>いの、この土地<sup>とち</sup>は、私<sup>わたし</sup>が<sup>う</sup>生まれたところだ。それがのう、この年<sup>とし</sup>になるまで旅<sup>たび</sup>で暮<sup>く</sup>らしたが、いいこともないので、帰<sup>かえ</sup>つてきた。だれも私<sup>わたし</sup>の顔<sup>かお</sup>を覚<sup>おぼ</sup>えているものも、知<sup>し</sup>っている人<sup>ひと</sup>もいないのだ。だが、この土地<sup>とち</sup>がなつかしくて、ここへくるわけなんだ。おまえさんは、話<sup>はなし</sup>もうまいし、顔<sup>かお</sup>も広<sup>ひろ</sup>いし、ここでなければならぬこともなからうが……。」と、おじいさんが、いいました。

「ああ、そうか、おまえさんは、ここで生まれたのか？ それは、なつかしいだろう。わかったよ。おじいさん、明日から、私は、ほかでかせぐことにしようよ。」

紙芝居のおじいさんは、みんなに向かつて、帽子を脱いであいさつをすると、あちらの町の方へいつてしまいました。

二人の少年は、なんとなくさびしい気持ちになりました。そして、先刻、松の木の下にすわって、空を見て、空想にふけたことが思い出されたのであります。

「人間にも、あの松の木のような人もあれば、また、雲のような人もあるんだね。」と、博くんが、考えながら、いいました。

立雄くんは、だまっていましたが、しばらくして、

「ねえ、博<sup>ひろし</sup>さん、おじいさんの子<sup>こ</sup>供<sup>ども</sup>の時<sup>じ</sup>分<sup>ぶん</sup>から、あ<sup>まつ</sup>の松<sup>まつ</sup>の木<sup>き</sup>は、あつたんだね。」と、立<sup>たつ</sup>雄<sup>お</sup>くんは、別<sup>べつ</sup>のこ<sup>こ</sup>を考<sup>かん</sup>え<sup>が</sup>て<sup>い</sup>た<sup>と</sup>みえ<sup>て</sup>、うしろを振<sup>ふ</sup>り返<sup>かえ</sup>つて、空<sup>あ</sup>き地<sup>ち</sup>の真<sup>ま</sup>ん中<sup>なか</sup>に立<sup>た</sup>つて<sup>い</sup>る松<sup>まつ</sup>の木<sup>き</sup>をながめて、いったのであります。

よく晴<sup>は</sup>れた、空<sup>そら</sup>の、あちら、こちらに、たこは上<sup>あ</sup>が<sup>つ</sup>て<sup>い</sup>ま<sup>し</sup>た。しかし、白<sup>しろ</sup>い雲<sup>くも</sup>は、ど<sup>どこ</sup>へ<sup>い</sup>つ<sup>て</sup>し<sup>ま</sup>つ<sup>た</sup>か、も<sup>もう</sup>、見<sup>み</sup>えな<sup>か</sup>つ<sup>た</sup>のであります。

# 青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 12」講談社

1977（昭和52）年10月10日第1刷発行

1982（昭和57）年9月10日第5刷発行

底本の親本：「日本の子供」文昭社

1938（昭和13）年12月

初出：「教育行童話研究」

1937（昭和12）年1月

※表題は底本では、「町《まち》はずれの空《あ》き地《ち》」  
となっています。

※初出時の表題は「町はずれの空地」です。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：酒井裕二

2017年5月20日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 町はずれの空き地

小川未明

2020年 7月13日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>